

# 鳥インフルエンザ—— 新しい展開への考察⑤

加藤宏光

## 検疫エリア

鶏太が昨年経験したHPAIでは、検疫エリアは半径三〇キロの広きに及んだ。それゆえに、三週間に及ぶ移動禁止期間の製品処理に苦勞したものであった。

高病原性鳥インフルエンザという表現であれば、そのまま訳せばHPAIであり、昨年、鶏太が被ったモノと同じと考える。もし、昨年と同じ規制がかれば、鶏太の農場が含まれる可能性が高い。しかし、業界はこれといった動きも見せずに平穩そのもので、卵価も高水準のままである。

鶏太が家畜保健衛生所に事の子細を確認しようと、電話に近づいたとき、ベルが鳴った。

「はい、源氏です」

鶏太の耳に、聞き覚えのある声が響いた。

「南西家畜保健所のSです」

「ああ、S先生ですか。私から電話しようとしたところでした。家畜保健所からのFAXを頂いたのですが、またAIですか？」

と鶏太は尋ねた。

「そうなんです。実はIBと疑われた病性鑑定サンプルの気管から、AIウイルスが採れちゃったんです。家畜保健所でも困惑してますが……」

Sの答えに、鶏太は驚いて聞き返した。

「ということは、LPなんですか？ トリは死なないんですか？」

Sは口籠りながら説明を始めた。

「この症例は×△さんで発生しました。病鶏は四月以来、三度持ちこまれました。私達もこんなことがあるのか、と不審に思うのですが、正直、このAI自体明らかな病原性を示さないのです。当初軽い呼吸器症状を示し、産卵が低下しましたが、ウイルスが分離された時期には、抗体で見ると限りIBの動きもありません。

産卵低下は一過性に治まりました。AIウイルスが分離されたのは、三度目の病性鑑定サンプルからで、その時点では、産卵は回復してたんです。×△さんは、『今後のワクチネーションを検証するためにも、IBによる産卵低下であることを、何とか確定したい』とのことで病性鑑定を依頼されましたが、その呼吸器から、AIウイルスが採れました。正直な印象では、まったく症状のな

い鶏群からAIウイルスが分離されるとは……。源氏さんのケースが鳥インフルエンザのパターンだといった感じが私の意識に刷りこまれていたんですねー」

Sは、一息に話した。

鶏太は自分の経験したAIとあまりに様子が異なるため、実感がわかない。

「要するに、AIによるはつきりした症状はなかったのですかね？」

鶏太の問いに、

「そうです」

とSは答えた。

「産卵低下も呼吸器症状も？」

「そうです」

「死ぬトリもなし？」

「そうです」

鶏太は、どうしても納得がいかない。

「それでも、高病原性ですか？ 低病原性ではないんですか？」

Sが説明する。

「高病原性ということので、よく誤解されるのですが、症状が強くて弱くても、ウイルスがH5かH7だと、高病原性鳥インフルエンザと呼ぶことになってるんです。死亡率が高いものは高病原性で強毒タイプ、症状

の弱いものは弱毒タイプと呼ぶんです」

「やはり、H5N1なんですか？」

鶏太の去年の苦い経験を思い出しながらの問いかけに、Sは答えた。

「動衛研の同定結果ではH5ですが、Nの2ということでした。」

「N2！ そんなA Iがあるんですか!？」

「Hには一六、Nには九タイプあるんです。その中で、H5とH7については、人に新しいタイプのインフルエンザを起こす原因となりうるということが、WHO(世界保健機構)が特に注目しています。OIEという、世界の獣疫管理基準組織で、この二つについては、特に注意して管理するように、マニュアルができています。H5には一から九まであります。源氏さんが去年受けたH5N1は、香港で人が死んだ例がありますね、あれに一致するので、特に注目を集めた、ということですよ」

Sは専門に属することを含めて、鶏太に説明した。

「そういったもんですか!？」

鶏太は納得できないまま、曖昧に答えた。

Sは続ける。

「それで、今回は前と違って、移動禁止のエリアは半径五キロと、相当縮まっています。お宅の第一分場が×△さんから半径五キロの検査領域に入っていますので、明日、検査に伺います」

## 検査

検査領域内の農場内では、すべての鶏舎から一〇羽分の採血が行われる。これらのサンプルは、県の病性鑑定室でA G P試験が実施され、陽性が出れば動衛研へ持ち込まれて、H Iテストで確認されることになる。A G P試験は、二十四時間目に予備判定が実施され、四十八時間目に最終的な結論が出るのであるが、二十四時間で陽性の可能性があれば、管轄家畜保健所から当該農場への連絡が来る。

鶏太の農場では、H P A Iからの復帰に際し、S獣医師が再々訪れていた。A G P試験により農場の清浄化を確認するためであった。

「お宅でA Iが出ることはないと思いますよ!」

Sは採血しながら、立ち会っている鶏太に語りかけた。

「実際のところ、L P A Iの発生はどんな具合だったのですか?」

鶏太は尋ねた。

「×△さんでは、オープン鶏舎で、ウィルスが採れたのは、四百日齢の若くないロットだったのですが、成鶏舎ではA G Pが何例か陽性で、H Iテストでは全鶏舎の採血したものが全部が陽性だったのです。ところが、二、三〇〇メートルしか離れていない育成鶏舎ではまったく陰性だったので、不思議に思っているのですよ」

Sは、初発農場の状況を簡単に説明した。

「あの付近には、いくつか農場がありましたね。あの辺りは全部検査されるのでしょうか?」

鶏太はあまり付き合えない農場名を思い出しながら問いかけた。「そうです。今日、別の担当が出勤しています」

Sは事情を説明した。

「現実に昨年、最初のL P A Iとして発現した事例では、陽性である成鶏農場から五〇〇メートルしか離れていない育成農場ではA I陰性でした。残念ながら、この育成鶏も汚

染の可能性を憂慮されたために殺処分が付されましたが、A Iウィルスが水平に伝播するためには人為的な要因が必須となる可能性を示唆するものとして注目されます」

検査エリアをA G P試験で出された結果では、対象六農場の中の一農場で一群のみ、それもその農場の一〇鶏舎一〇群について採取された一〇〇本の血液サンプルのうち一例のみが陽性を示した。

動衛研では、送付されたサンプルについて、最優先でH Iテストを実施した。検査担当の技官、山野は首を傾げた。

「田塚さん、この症例、一例だけがA G P陽性ということでしたよね!？」

「そうだよ。どうだい? 陽性例はあるかい?」

側に近寄りながら問いかける山野の指導官、田塚に山野は答えた。

「前の症例では、A G Pが半分くらい陽性でしたよね。それでも、H I価は全部陽性でしたけど、数値は一六から三二倍くらいでした。今度のはA G Pで一例だけが陽性なのに、H Iでは全部陽性なんです。それに、

標準のH5N3では前の試験と同じように、六から三二倍ですけど、×△の株で調べると、H1価が五二二〜五二二八倍で、数値が全然違うんです」

「本当か」

田塚は、試験結果の出ているプレートを覗き込んだ。

「ホントだ！ こんなことは、相当株の間に差がないと起きない」

「現実に北海道で分離された株によって実施された検査では、それまで使用されていた標準株とは相当株間の差異があるといわれます。」

実際に著者が陽性の卵黄で実施している検査結果でも、動衛研で実施された結果を参考とする限り、一〇分の一〜三〇分の一程度の感受性しかないようです。この結果を踏まえる限り、単純にAGP試験を一度行って陰性であるとしても、それで安心できるとは限らないことを実感しました。また、こういった株の差異が、十分なワクチン効果を期待できないような事態を招く要因として憂慮されます。

米国アイオワ州のUSDAラボの実験データでは、北海道で分離され

たものと近いメキシコ株は、現在、わが国で備蓄されているH5N2株のワクチンでは十分な効果を示さない、というシヨッキングな結果が発表されています(実験手法には多少の検討が必要である、という印象を持つてはいますが…)」

こういったやりとりがあったことは、インターネットでプレスリリースを見るのみの生産者にはわからなかったが、株差が大きいという情報は、何かしらフィールドに不穏な雰囲気を漂わせはじめた。

この結果を踏まえて、当初の《AGPテストで陰性なら、安心できる》という判定基準に対して、家きん疾病委員会と行政が新たな基準を設ける必要性を感じた。

第一次試験の結果、陰性結果を得た鶏太の事務所の電話が鳴った。たまたま側にいた鶏太が受話器を取ると、聞き覚えのある声が聞こえた。「西南家畜保健所のSですが…」

鶏太は、答える。

「ああ、S先生。今回のウイルスは随分変わったモノだそうですね！」  
「そうなんです。それで、申し訳ないのですが、陰性だったお宅の、第

一分場のサンプルを動衛研に送ることにしました」

「そうですね。まあ、安心のためです。結果が分かったら、すぐご連絡をお願いします」

「現実のケースでは、当初AGPテストで完全陰性のサンプルを動衛研に送り、H1試験を行うことはありませんでした。しかし茨城においては、その後、H1試験そのものを家畜保健衛生所において実施できるようにしたため、迅速な判断をするために、家畜保健衛生所ですらH1試験を第一次試験として実施するようになった、と聞いています。この処置により、物語と同様のシステムとなつたものと考えています」

鶏太は採材の折にSと話した内容から、さしたる不安感を持たなかつた。

「源氏さんのところは、HPAI以来随分検査してましたよね！ あれから半年余りですが、随分気をつけておられることがよく分かります。ここで陽性なら、陰性の農場なんてないですね！」

その時、Sは鶏太に語りかけたも

のであった。鶏太にとっても、その気持ちと同じで、何の不安も感じなかったのである。

血清サンプルは、非特異反応を除くRDE前処理をするため、結果を出すのに二日を要する。同日に採取された六農場の全サンプルを同時に検査に付された。

### 殺処分悲劇

「残念ながら、全例がH1陽性でした。詳細は、改めて書類をお持ちしますが、とりあえず、結果を、お返し、ご連絡しようと思ひまして…」

受話器から響くSの言葉は、いつもと異なり、紋切り調の雰囲気があった。

「…そうですね…」

鶏太の頭は真っ白になり、咄嗟には何も浮かばない。

陽性事例については、関連するすべての農場についての検査が実施される。鶏太の農場全体を検査するという連絡書類と検査結果および殺処分の連絡書類は同時に届けられた。その書類には、鶏太の第一分場を含む六農場、一五万羽に対する殺処分決定が記載されていた。

日を置かずに、Sと三人の検査員が鶏太の農場を一つずつ巡回し、一鶏舎あたり、一〇羽ずつについて採血し、気管と肛門のサンプルを採取して持ち帰った。

県の病性鑑定所もフル稼働で、検査結果を大急ぎで出す体制を構築していた。しかし、この時点まで県が実施できる検査はあくまでAGPテストのみで、最終検査は動衛研に持ちこまれることになっていたため、AGPテストで陰性の検体をそのまま陰性と判断するか、すべてをHI試験に回すかで見解が分かれた。

第一にこのLPAIには、産卵の低下等の明確な症状がないため、検査する側にもこれを高病原性鳥インフルエンザとして処理することに、心理的な不安感があった。厳密に調べることで、被害を人為的に造り出すかのような、妙な気分させられるのである。

色々議論の上、動衛研の協力を得てすべてのサンプルのHI価を検証することにしたのであった。その結果は、予想を大きく上回った。鶏太の四〇万羽あまり羽数からなる、すべての農場で、ウイルス存在確認テストは陰性を示したものの、HI試

験ではすべてのサンプルが陽性結果を示し、LPAI罹患鶏という診断が下された。

すべての羽数の殺処分が決定されたのである。

殺処分対象のニワトリは、ケージから引きずり出され、一五キロ入りの厚手のポリ袋に一〇羽ずつ押し込まれて、炭酸ガスを注入される。

「なぜー なぜですか？ このトリは九五%も産んでるんですよー 病気じゃないでしょ。九五%も産んでるし、何の症状もないし！」

若い亮太は、立ち会う鶏太に泣き声で食ってかかる。

「俺も何がなんだかわからんー 去年のHPAIなら、どんどんトリが死ぬのだから、しょうがない気もした。でも、このトリは……」

鶏太自身、悔しくて憤りを抑えきれない。

「人間って、何と勝手なんだ。勝手な規則を決めて、一生懸命タマゴを産んでるトリを、規則とやらで縛って、殺す。人間にだけ、そんな我が儘なことが許されるのか!! 自然の冒険じゃないのか」

鶏太は、どうしようもない気持ちで、茫然としている亮太に叩きつけ

るように叫んだ。

その後の検査で、五〇万羽、一〇〇万羽の生産農場を含む一五〇軒を超える農場が散在する、わが国で指折の大養鶏地帯一面でA I陽性であることが判明した。総羽数は三五〇万羽を優に超える。

行政の指針は、この事態を受けて一変した。《オープン鶏舎では、変わらぬ殺処分の方針であるが、ウインドウレス鶏舎では、ウイルス分離試験陽性のケースでは殺処分であるが、二週ごとのウイルス分離試験を実施しながら観察する》というものである。鶏太にとってみれば、不審としか表現のしようがない方針の転換である。

当初にA I抗体が陽性であると判定された鶏太の地域では、飼養形態の差を問わず、全群が殺処分とされた。しかし、それから一カ月余り後に発生したウインドウレス鶏舎では、観察処分にするというのである。行政がいかに弁明しようと、巨大な規模の農場で陽性となった場合を想定していなかった行政サイドが、動転して日時稼ぎをしたとしか判断できない。

「そんな馬鹿なことが、あってよい

ものか！ 法の適用が公平でないことは、差別ではないのか？ 俺のウインドウレス鶏舎ではウイルスキャリアが出て、巨大システムのウインドウレス鶏舎では、同じニワトリでもウイルスキャリアが出ないというのか！」

鶏太の心中には沸々と怒りが湧く。

## 闇ワクチン

鶏太の農場に殺処分命令が下されている中で、ウイルスの性格と汚染の実態を踏まえて、家さん疾病小委員会では、今回のL P A Iの発生原因について、不可抗力的な原因の推察に加えて《闇ワクチンの使用の可能性も排除しない》という、思い切った判断を示唆した。その根拠として次の点が指摘された。

「1」この株がメキシコの株に近縁であり、中米エリアからの渡り鳥がわが国に飛来する可能性が低いこと

「2」罹患鶏群における抗体の均一性は、従来のL P A Iとは大きく異なり人為感染の容易な変異株

である可能性が高いこと(本来、L P A Iの自然発生例では、ウイルス感染に対する個体の感受性差があるため、陽性鶏群においても、一〇〇%が陽性を示すことは稀である、という)

「3」高率の感染率に比較して、ウイルス分離率が低すぎ、感染時期が極めて短く、その短期間で齎る一な感染をしていることは自然感染と異なること

《A I発生を被れば最後》――。

業界では警戒を促すために、こういう表現がよく使われる。しかし、考えてみればこういうふうに言われることで業界のムードに一種恐ろしい環境をもたらししていた。

仮定の話をする。今、H P A I感染の脅威を考えると、《発生したら、即倒産》という仮定のもとに、無病原性のA Iが生ウイルスで使えらるという情報を得た場合に、そして、もし使ったことがばれなければ、A Iワクチンとしてこれを応用して、ニワトリに抵抗力をつけて防衛したい、という欲望に駆られる人があることは理解できる。

これまで養鶏業界においては、地方行政に対する不信任から、家畜保健所の職員が農場へ直接立ち入ることを拒否することがよくあった。かつて、行政のスタッフが、着衣を替えることなしに、同一日程で複数の農場を巡回することを通常としていたこと、そして、それが原因で鶏病の蔓延を招いたという噂があった、ことがその原因であった。

H P A Iが発生したら即倒産とすれば、そしてもし、ラフな検査の網を潜り抜けることができれば、経営を維持できる、とすれば、必死に経営を維持する生産者にとっては、この最悪の選択を選びなくなる人が出ないとは言いが切れない。特に、商品の流通停滞が致命的となりうる、現在の厳しい流通競争が、昨年のH P A I発生に伴って、切羽詰まった感覚を一部の生産者に植え付けていたのである。

(株)ピーピーキューシー研究所代表取締役／農学博士・獣医師)